

## これからの学士に求められる人材教育 —フシンセツ授業という一つの提案—

【企画者】 たなかよしこ(日本工業大学)

【司会者】 馬場眞知子(東京農工大学)

【報告者】 小山義徳(聖学院大学)

河住有希子(日本工業大学)

長 加奈子(北九州市立大学)

田中佳子(日本工業大学)

瀬村江里子(松本歯科大学)

### 1. はじめに

18歳人口の半数が大学に入学し、学士となる今日、社会に出てなおかつ生涯学びつづける人材育成が求められている。

しかし、現実には新卒3年以内の退職者の3割が大卒者である。また、25歳以上のニートが36万人、フリーター91万人と大卒高学歴層に占める無業者の割合も大きくなっている。

そこで本ラウンドテーブルでは、大学の教育現場でどのようなアプローチをすればこれらのニーズに応えられるかについて議論を行った。5名の話者提供から、各教育現場における教育方法・授業改善の事例等を報告してもらい、参加者とともに検討した。

### 2. 話題提供 1

学習者の質問生成スキルの育成(小山義徳)

人生を60年と考えると、大学卒業までの22年間よりも、卒業後の期間の方がはるかに長い。そのため、学生が大学卒業後に自らの頭で考え、学ぶことのできる素地を在学中に育てることが肝要である。

本発表では「自ら考える力」とは、「自ら問いを立てることのできる力」と考えた。例えば、学生が就職して営業の仕事に就いた

[テキストを入力]

際に、上司に言われるがままに働くのと、「お客さんが本当に求めているものは何なのだろう」と自ら立てた問いを持った上で働くのでは、大きな差がある。問いを立てることができるようになると、物事を見る際に注意が焦点化される。注意が焦点化されると、今まで気がつかなかったことに気づくようになり、学びが生まれる。学びが生まれると、また自分の中に問いが生まれる。この「学びのサイクル」が機能するには、自ら問いを立てる力である、「自己質問力」の育成が必要である。

そこで、本発表では、学生の「自己質問力」を育成することを目指した授業実践と、そこから明らかになったこと、今後の課題について報告を行った。

### 3. 話題提供 2

学びを支援する教員の葛藤(河住有希子)

アカデミックスキル養成のための授業を行っても、教師がスキルを教授し、教師の指示のもとで学生が練習し、学んだスキルがどの程度再現できたかを教師が評価するといった授業形態では、学生が主体的に学ぶ力の養成には至らないことが多い。

そこで、それに代わる授業として、教師からは学びのきっかけを提示するにとどめ、ど

態において、教師の役割は、学生の不安やいらだちを見守り、自分の力で一步前に進むとした時にその後押しをすることである。しかし、この役割には忍耐力を要する。教師も学生と同様に、教えていないことへの不安を感じ、安易に手助けを求める学生を自分自身の学習に押し戻すためのやりとりにいらだちを覚える。

本報告ではこのような苦しみを伴う学びの実情を報告し、支援の方法を考えるための話題提供とした。

#### 4. 話題提供 3

思考過程の視覚化による「気づき」への導き  
(長 加奈子)

初年次教育の分野で「気づき」がキーワードとして上がって久しい。高等学校まで与えられることに慣れてきた学生が、大学に入學して「自ら考えること」を求められる。それを学習活動の一つとして取り入れたのが、馬場・田中(2006)の「気づき」シートである。

「気づき」はメタ認知活動であり、あらゆる学びの過程において重要な役割を果たしていることは、言うまでもないであろう。ではどんな学生でも、最初から「気づき」ができるかということと必ずしもそうではない。そこには大きな壁が存在する。

本発表では、多くの大学で必修もしくは選択必修となっている英語科目の中で、いかに学生の「気づき」を引き出すか、その授業実践について、特に学生の思考の「視覚化」をキーワードとして報告を行った。

#### 5. 話題提供 4

「正解」と自律的学び(瀬村江里子)

小中学校や高等学校で使用されている副教材や問題集、定期考査の問題の多くが、ある一つの特定の答えしかあてはまらない形式で作られている。筆者も学生時代は「問いかけられたことに対し短時間で正確に答えられるようにする」ことを「勉強する」ことだと思

っていた。つまり、(ある問いに対応する)答えが問題集の正答のように必ず用意されていて、その正答を早く「手に入れよう」としていたのだ。自ら問いを立て、自分で考えて工夫していくプロセスを楽しむ、あるいはおもしろいと感じることが自律した学びにつながるのではないか。

馬場・田中(2006)のアクティビティ教材の「言葉あて」では、筆者の実施する授業では、1回の説明で相手に伝わるのが良い、それが正解だと捉える学生が多い。しかし自分が考え得るいろいろな方法を試してみる、その、相手に伝わるまでのプロセスを経験することが大切なのではないだろうか。

本報告では、教員が学生とのやりとりの中で、学生の自律した学びをいかにサポートすることができるかを話題とした。

#### 6. 話題提供 5

自ら学ぶとは何を学ぶのか(田中佳子)

大学での学力支援の一環として、習熟度別クラス分けが、数学・英語・物理・日本語などの、リメディアル教育、初年次教育として行われている。教科指導としての習熟度別は教える側の目的を明確化し、教員配置にも役立っている。

他方、「学び」の教育を目的とする授業では習熟度別小クラスとは異なり、大教室多人数という教室活動の実践を提案した。

本報告では、「フシンセツ」な授業実践で見られた学生の変化を具体的に伝えた。「フシンセツ」授業は、教室を学生の失敗が許される場として捉え、学生が試行錯誤する機会をどのように作るかということに配慮するものである。そのような授業の利点と難点を含めて報告した。

#### 7. 参加者の感想

参加者の感想としては、「学生の気づきには期待できない。大学の大きさ、授業への参加度によって気づきが変わる」といったものか

ら、「本日の話題にあがったことは、大学 4 年間のどの授業でも続けることが必要だと思う」、「社会科学の授業を担当しているが、根本的に組み直す、考え直す必要があることが分かった」、「気づきを産むために、見えないところで仕掛けを用意する工夫の可能性がもつとあるかもしれないと思った」、「自分の指導法を見直すチャンスを得た」などがあつた。

## 8. 謝辞

本ラウンドテーブルを聴きに来て頂いた方々、大会実行委員の皆様に感謝します。

### 参考文献

馬場眞知子・田中佳子 小野 博・林部英雄(企画監修) (2006) 『やってみればおもしろい! 大学生のための日本語再発見』 旺文社  
佐藤 光 (2010) 『マイケル・ポランニー「暗黙知」と自由の哲学』 講談社選書メチエ

本研究は文部科学省科学研究費基盤研究(C) 研究課題番号 22500892 代表者田中佳子「理系学士課程における個に応じたコースデザインの開発」の助成を得た。